群教セ	F09 － 01
	平17.231集

温かい人間関係を築ける楽しい学校づくり
――「ほっとルーム」の運営と異学年交流を中心として ――

特別研修員　　神村　武志（前橋市立滝窪小学校）

《　研究の概要　》

本研究は、温かい人間関係を築き不登校の予防を図っていくための研究である。「ほっとルーム」運営の中や異学年交流での働き掛けの部分にピア・サポートトレーニングを取り入れることにより、思いやりの心、助け合う心を養い、支え合える温かな人間関係が生まれると考えた。また、高学年児童が中心となり様々な異学年交流・支援活動を行っていくことにより、一人一人が生き生きとした学校生活が送れるのではないかと考えた。

キーワード　【教育相談　ほっとルーム　ピア･サポート　異学年交流】

Ⅰ　主題設定の理由

本校の児童は、登下校時とてもしっかりとあいさつができる。これは伝統的なもので、道路を横断するために車が止まってくれた時、横断した後必ず運転手にお辞儀をして感謝の気持ちを表している。これは、上級生から下級生へ自然と伝えられてきたものである。しかし、学校生活の中では、低学年の児童が一人でいたり、困っている児童がいたりしても、声を掛けずに自分の遊びに夢中になってしまう姿が見られることもある。本校が行っている朝行事を使っての縦割り班での活動でも、同じ時間を共有し、同じ遊びを楽しむだけで終わってしまっている場面も見られる。このような実態であるため、積極的に助け合ったり、支え合ったりするような発展的な姿が多く見られるような活動にしていきたい。学級においても、孤立しがちな児童や問題行動をとる児童への対応を図るとともに、どの児童においても、現在の適応状態を改善するための一つとして、より良い対人関係を学ぶ場が必要とされていると考える。

そこで、本校において、予防的・開発的な教育相談を行っていく場として「ほっとルーム」を設置し、この運営を工夫していけば対人関係能力を高めることができるであろうと考えた。

異学年交流の場においては、互いに認め合える集団の育成を目指した教育相談的な活動を取り入れ、指導に当たる教職員の共通理解の下、教師の様々な立場から、温かな人間関係づくりの支援をしていくことが必要であると考えた。一過性の活動にとどまらないよう、発展的・自主的活動としてコンピュータ支援隊の活動を取り入れていきたい。

以上の理由から「ほっとルーム」を設置し、運営を工夫するとともに、異学年交流の場面にピア・サポートトレーニングを取り入れることを通して、やさしくできたり、助け合うことができたり、互いに支え合うことができたりする温かな人間関係づくりを支援していけるようにするため、研究の主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

温かい人間関係を築くために、「ほっとルーム」の運営を工夫し、異学年交流の場面に、ピア・サポートトレーニングを取り入れることは、有効であることを明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　研究の場

(1)　異学年交流(事前･事後)

(2)　コンピュータ支援隊

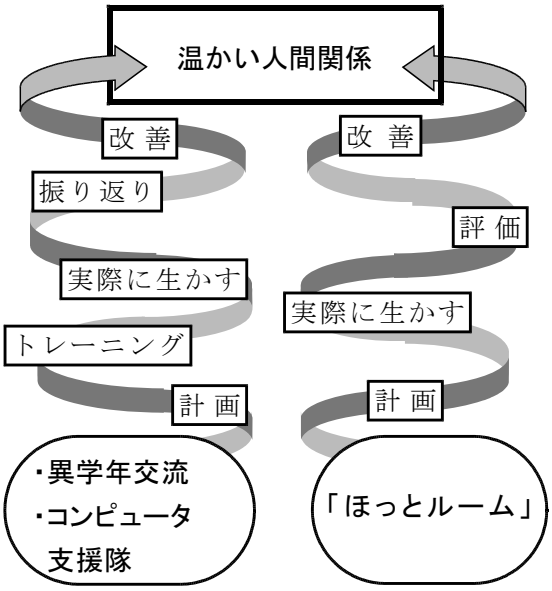
(3)　「ほっとルーム」

2　研究の方法

「ほっとルーム」を設置しだれでも、自由に入室できるような雰囲気作りをして、人間関係づくり、情報発信の場としていきたい。人間関係づくりの基本は、児童の自分のクラスであるが、「ほ

っとルーム」は、日常生活の中での疲れをいやしたり、授業などで頑張るためのエネルギーを蓄えたりする場としていく。大人でも、疲れると旅行へ行きたいと思う人がいる。旅行へ行くということは、とても楽しいことである。しかし、自分の家に帰ってきて、一番思うのは、やっぱり自分の家が一番良い、ということではないであろうか。「ほっとルーム」と児童が所属しているクラスとの関係をこのように位置付けたい。「ほっとルーム」へ行くことによって、クラスの良さを再確認したり、友達の良さに気付いたりできるような場にしたい。

図１　研究のイメージ図



異学年交流の場では、上級生が下級生を思いやり行動する、互いに支え合える温かな人間関係を育成していきたい。異学年で交流を行う際、上級生を対象に事前にスキルトレーニングを行い、下級生にどのように接すれば、より一層理解してもらえるか、仲良く活動できるかを体験し考える場及び交流後に振り返る場を設定する。スキルを繰り返し行っていく中で、下級生のみならず、周囲の人々に対する思いやり、やさしさ、協調性なども身に付いてくるであろう。コンピュータ支援隊の活動を取り入れることにより、発展的な異学年交流ができるのではないかと考える。「ほっとルーム」の機能を生かして、一人一人が目標をもち、活動に参加し、振り返りを行うことを繰り返すことで、互いに支え合える温かな人間関係の育成を図ることができると考える。

Ⅳ 研究計画

表1　計画の概要

月	児　童　の　活　動	ね　ら　い
４月	○１年生を迎える会 ・全校で、１年生の入学を祝う。	・１年生の入学を祝うことを通して、共に喜ぶことの大切さを知る。
６月	○サツマイモの苗植え ・事前スキルトレーニング ・サツマイモの苗植え ・終了後、サツマイモ植えの振り返りをする。 ○コンピュータ支援隊の組織作り	・人に物事を伝えることの大切さや言葉がけの重要性を知る。（５・６年生） （上級生は、下級生に植え方などを分かりやすく教える。）
７月	○縦割り班遊び みんなが楽しめる遊びを考え、伝え方を考える。 ・事前スキルトレーニング ・縦割り班遊び ・終了後、縦割り班遊びの振り返りをする。	・一緒に活動する人のことを考えて、理解しやすいように伝える大切さを知る。
８・９月	○「ほっとルーム」運営開始 ○運動会　応援合戦など	・温かい言葉がけが相手を元気にすることに気付き、互いに励ましの言葉掛けをすることができる。
10月	○サツマイモ掘り ・事前スキルトレーニング ・サツマイモ掘り ・終了後、サツマイモ掘りの振り返りをする。	・コミュニケーションの楽しさや、みんなで収穫する充実感を味わう。
３月	○６年生を送る会 ・１～５年生が、各学年ごとに６年生へプレゼントを贈る。６年生に感謝の気持ちを込めて、プレゼントをする。	・１年間の様々な活動を振り返り、互いに信頼して活動する大切さを知る。

Ⅴ 研究の概要と考察

1　異学年交流

月	児童の活動と様子	教師の気付き・考察
6月	**1　サツマイモの苗植え** **(1)　事前スキルトレーニング（5･6年生対象）** １年生のモデルに教師がなり、サツマイモの苗の植え方を１年生が理解しやすいように、伝え方のスキルトレーニングを行う。	・代表で、スキルトレーニングをしていた児童は、戸惑うこともあったが、教師のサポートもあり、言葉がけや動作に気を付けることができていた。
	周りで見ていた児童の感想から抜粋 親切に教えていた。１年生に優しく教えてあげたい。大きい声で話しかけると良かった。１年生に教えるのは、難しいな。１年生のレベルに合わせて話をしてあげないとだめだな。	
	(2)　サツマイモの苗植え サツマイモが植えやすいように、事前に、５・６年生が、畑にさくをきり、マルチシート掛けを行った。 当日は、朝行事の時間を使って、縦割り班ごとに、苗を植えた。５・６年生は、１・２年生へ植え方を伝え、一緒に苗を植えた。みんなで協力し合って苗を植えることができていた。 **(3)　終了後の感想**	・手順をとても良く心得ていて、とても丁寧に分かりやすく教えていた児童がいた。その反面、教えてあげたいのだけれど、自信が無く教えてあげられない児童がいた。事前スキルをする必要性、大切さを感じた。
	２年生 ６年生のＡ君が「Ｂ子ちゃん、なえうえるかい」と言ってくれたのでちょっとうれしかったです。	１年生 ６年生のおにいさんと、おねえさんにおしえてもらってうれしかったです。
	６年生 私は、１年や２年の時、大きい人に植え方を教えてもらったけど、今では、私たちが教える側になってとても大変でした。今度、下級生が教える側になったら今日教えたことを教えてほしいと思います。秋には、とても大きいサツマイモが育ってほしいです。	６年生 サツマイモの植え方を教えてあげているときに、「分かった」とか、「ありがとう」って言われたときにとってもうれしかったです。教えるのっていいなって思った。 ・代表児童の感想を「ほっとルーム」の廊下壁面に掲示した。
7月	**2　縦割り班遊び** **(1)　事前スキルトレーニング（6年生対象）** みんなが楽しめる遊びを考え、伝え方を考える。 **(2)　縦割り班遊び** リーダーは、ルールを分かりやすく伝えることができ、班ごとにみんなで楽しく遊ぶことができていた。	・サツマイモの苗植えの時よりも、低学年の実態に合わせて考えることができていた。 ・問題があっても、６年生が公平に問題に対処することができていた。
	児童の変容 ６年生男子Ａ男は、勝ち気で、自分中心に物事を進めたがる傾向があったが、縦割り班遊びでは、班のみんなの意見に耳を傾け、両方のチームが平等になるようにチーム分けをし、楽しくゲームができるように心配りをしている様子が見られた。	
	(3)　振り返りの感想	
	６年生 とても楽しくできたし、１年生も笑いながら楽しそうにしていたので、良かったです。次にやるときは、もっと楽しい遊びをしたいと思います。	６年生 ケードロをしました。ルールが分からない人もいましたが、私の説明や周りの人から聞いて、すぐに覚えてくれて良かったです。「疲れたけど楽しかった。」と言ってくれてうれしかったです。
	１年生 楽しかったよ、お兄さん、お姉さんたちが優しく教えてくれたよ。上手にできたよ。	１年生 すごく楽しかった。そして、もう一回やりたいぐらい楽しかった。

10月	**3　サツマイモ掘り** **(1)　事前スキルトレーニング（6年生対象）** 　低学年の児童が、収穫したイモを勝手に自分のものにしてしまったらどのような対応をしたらよいか考えた。 **(2)　サツマイモ掘り** 　サツマイモを掘りやすいように、事前に、５・６年生が、つるやマルチシートを取る作業をした。当日は、朝行事の時間を使って、縦割り班ごとに、イモ掘りをした。６年生は、低学年児童のサポートをしながら、みんなで協力し合ってサツマイモ掘りをすることができていた。 **(3)　振り返りの感想** ６年生 　みんな、一生懸命イモをさがしてくれた。後半は、多分５年生が指示してくれたのだと思います。来年は、もっと収穫量を増やして頑張ってほしいです。 ６年生 　１年生や２年生に色々掘り方を教えられた。１年生から６年生まで、全校でサツマイモ掘りができて楽しかった。 １年生 　６年生といっしょにやりました。６年生に手伝ってもらいました。たのしかったです。 ５年生 　後半から６年生がいなかったので、後半は、５年生中心にやっていきました。１・２年生を手伝ったり終わった後にシャベルを片付けたり大変だったけど、とても楽しかったです。 ３年生 　サツマイモが５こぐらいついていてよくとれませんでした。だから、Ａ子ちゃんとか、４・５年生に手伝ってもらって、やっとぬけました。	・縦割り班活動での活動を何回か経験したことにより、どのような動きをするのかイメージすることが容易であった様だった。 ・縦割り班活動での異学年交流も回数を重ねるごとに高学年の動きが良くなってきた。低学年や友達のことを思いやって活動することができていた。 　周りのことを考え、互いに支え合える力が定着してきていることが伺われた。

2　コンピュータ支援隊

月	児童の活動と様子	教師の気付き・考察
6月	**1　コンピュータ支援隊の組織作り** 　６年生の希望者が、コンピュータチューターとなる。希望者が集まり、どのようなことを教えられるか話し合った。 (1)　コンピュータを教える時に心掛けることを考える。 (2)　下級生が、どのようなことが分からないか予想し、どのように教えてあげれば良いか、考え試してみる。(トレーニング) (3)　何年生を担当するか決める。担当する学年（1～3年生）が、コンピュータ室を使う休み時間に、支援活動を行う。 **教える際に気を付けること** ・コンピュータを使っていて分からないところを教えてあげよう。 ・教えていて分からないことがあったら、周りの友達に聞いたり、先生に聞いたりしよう。 ・分かりやすい言葉で教えよう。分からない子の気持ちになって話をしよう。	・６年生の在籍児童は、24名である。その半数以上の13人がコンピュータチューターとなった。下級生にかかわり、下級生のために行動してくれる児童が、予想以上に多く、頼もしく思えた。 ・低学年の児童は、「お兄さん、これはどうするの？」「お姉さん、絵をかくのはどうするの？」などと６年生を信頼していろいろなことを教わることができていた。 ・６年生は、自分が知っていることを生かして教えてあげようという意欲にあふれていた。
11月	**2　発生したトラブル** ・最初のうちは、意欲満々だったメンバーが、少しずつ意欲が薄れ、サポート活動をする児童が、数名になってしまった。	・担当する学年の下級生が、毎回コンピュータ室に来ない、ということもサポート活動が、滞る原因になっていた。

11月	**トラブルへの対応** 　今までの振り返りを行うとともに、コンピュータチューターに対して「下級生が、コンピュータをより楽しく使えるように、楽しい休み時間のちょっとだけで良いですから、時間を下さい。もし、担当の学年の下級生が、来なかったら、誘いに行って下さい。これからの滝窪小学校のために、力を貸して下さい。」と教師から投げ掛けを行った。 　その後、コンピュータチューターが、コンピュータ室で目立つようになり、下級生も安心してコンピュータ室へ行くようになってきた。

振り返りの感想

６年生 　教えた帰りに、「また来てね。」と言われて、うれしかった。これからも、喜んでもらえるように、教えたいです。	６年生 　「どうやるの。」と聞かれて、「こうするんだよ。」と教えるのがうれしかった。これからは、もっと一緒にできるように努力します。
６年生 　「ありがとう。」と言われてうれしかった。１年生の名前が覚えられなかった。今度は、名前をちゃんと覚えていきたい。	６年生 　１年生が頼りにしてくれてうれしかった。もっと良く知ってもらうために、一生懸命頑張りたい。

３　「ほっとルーム」

月	児童の活動と様子	教師の気付き・考察
７月	**１　「ほっとルーム」設置　職員作業** **・主な作業内容**：資料等の移動、畳の設置、掲示物の整理など 　総合的な学習の時間のための「とちのきルーム」の半分を「ほっとルーム」として開設。校内研修として、全職員で、作業に取り組んだ。 **・用意したもの**：畳８畳、観葉植物、ついたて、家具調こたつ、水槽、金魚、水草、金魚の餌、指人形、コミュニティー絵本など 　児童が、ほっとできるような空間作りをするために以上の備品を購入した。	
８・９月	**２　「ほっとルーム」運営開始** 「ほっとルーム」３モットー ○友達のよいところを見つけよう！　○だれとでもなかよくしよう！ ○マナーを守ろう！ 　児童が、温かい人間関係を築けるよう、一人一人が生き生きと学校生活を送れるように、「ほっとルーム」のモットーを決定した。全校児童に話をするとともに、「ほっとルーム」内にモットーの大書きを掲示した。	
	児童の使用状況 ・寝ころんで休んでいる。本を読んでいる。金魚を見ている。友達と絵をかいて遊んでいる。友達とクイズを出して遊んでいる。走り回っている。 ・「ほっとルーム」が、３年教室と４年教室の間にあるということと、２年生が、掃除当番であることから、主に、２・３・４年生が使用している。また、運動会期間中は、分校の児童も本校に来て運動会の練習をするため、「ほっとルーム」で授業をしたり、休み時間に来室したりしている。 ・「こんな部屋がうちにもあったらないいな。」という児童のつぶやきがあった。	・９月現在では、グループで「ほっとルーム」に来て、時間を過ごしていた。 ・様子を見に来た６年生が、「ほっとルーム」にいる児童に「またね。」と声をかけて行く場面が見られた。 ・走り回っていた児童は、それを見ていた教師、担任の教師から指導され、それ以降このような様子は見られなかった。 ・自然に異学年交流できる場となるような工夫の必要性を感じた。

11月	**「ほっとルーム」追加購入品** 　折り紙・色えんぴつ・ジェンガ・ツイスター・ＵＮＯ・黒ひげ危機一髪を購入。 誰とでも、コミュニケーションが取りやすいように、又、集団で遊ぶことができ、児童が来室したくなるような、備品を購入した。	
	３　発生したトラブル 　一つのゲームを複数の学年が取り合う場面があった。ＵＮＯを独り占めしたいため、ＵＮＯを隠してしまった児童がいた。購入した折り紙を、200枚置いたが、２日後にはなくなっていた。	・折り紙で作られた作品を飾ってくれるだろうと予想していたが、飾ってある作品は、１つもなかった。興味・関心があると、周りのことを考えられなくなる児童もいることがよく分かる出来事だった。
	トラブルへの対応 　トラブルがあった後、全校児童に「ほっとルーム」でのトラブルのことを話した。話し始めると、「はっとした顔」をする児童もいた。「後から来た友達が、同じゲームで遊びたいというときは、どうすれば良いだろう。」と児童に投げかけると、「一緒に遊べば良い。」という答えが、３年生児童から返ってきた。その後も、各担任から指導もあり、「ほっとルーム」の使い方・過ごし方は、とても落ち着いている。1年生から６年生までのすべての学年が、来室するようになった。同学年同士で遊ぶだけでなく、異学年で遊んでいる児童もよく見かけるようになった。	

Ⅵ 研究のまとめ

　サポート活動をしようとしても、今までにサポート活動を経験したり、考えたりしたことがない児童は、戸惑ってしまう。それが、６月のサツマイモの苗植えでは、顕著に現れた。事前スキルトレーニングの有用性を感じることができた。振り返りの場で、高学年の児童は、うまくサポートできたことや、次回への課題を見付けることができていた。下級生の振り返りでは、「６年生に教えてもらってうれしかった」などの感想も多々あり、感謝の気持ちが高学年児童にも伝わった。これは、高学年児童が、サポート活動に熱心に取り組む一因にもなった。縦割り班遊び、サツマイモ掘り、コンピュータ支援隊などのサポート活動の回数を重ねるにしたがい、より多くの高学年児童が、周りの人のことを意識して行動できるようになってきた。機会を見付け、継続的にサポート活動に取り組ませることの有効性を検証することができた。サツマイモ掘りの時には、６年生が校外学習のため、出掛けてしまい、５年生が途中からバトンタッチをすることになった。戸惑いながらも班の中心となり、作業を進め、班のみんなをまとめることができていた。自然に来年度へ向け６年生から５年生へのバトンタッチができていた。

　「ほっとルーム」の運営では、最初から規則を作るのではなく、児童の使用状況を見守りながら、ほっとできる空間の確保・人間関係づくりをする場の確保をしてきた。当初、同学年の友達と過ごしている児童が多かった。その後、児童の使用状況を観察しながら、ニーズに合った備品の購入、ルール作りをしてきた。新しく購入した用具の取り合いなどのトラブルはあったが、このトラブルを解消する上での、教師の支援・児童の変容を経てから、全ての学年の児童が、来室するようになり、同学年同士で遊ぶだけでなく、異学年で遊んでいる様子も多く見かけるようになった。異学年交流で培った対人関係能力が育ってきた一面を見たようだった。ルールを守り、友達と遊ぶ中で、友達の良さ、他学年の友達の良さを味わうことができてきた。しかし、意図的に異学年交流が盛んになるような手立てを検討する必要性も感じた。

　人間関係づくりという大きな枠の中で、異学年交流・「ほっとルーム」は、事前スキルトレーニングとなり、人間関係づくりに有効であった。これからもより温かな人間関係が作れるように、支援していきたい。

〈主な参考文献〉

・中野　武房・日野　宜千・森川　澄雄編著『学校でのピア・サポートのすべて』ほんの森出版（2002）

（担当指導主事　井上　淑人）